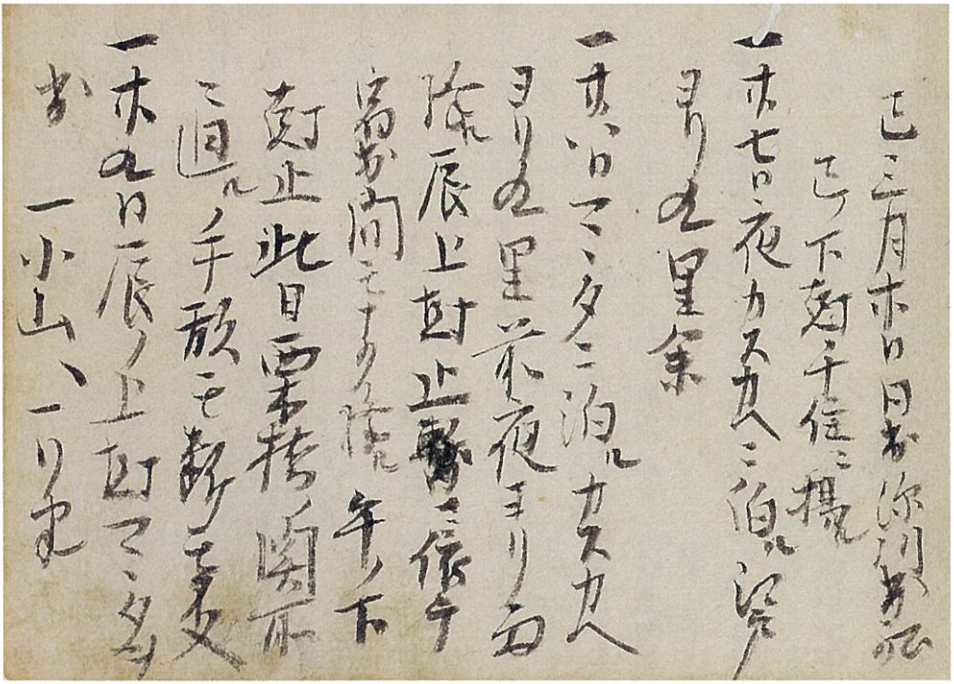
やまとの名品 天理図書館



曽良旅日記（奥の細道随行日記）（重要文化財）

河合曽良自筆
元禄２・４年（1689・91）　1冊
縦11.5cm　横17.0cm

天理図書館
曽良旅日記

『奥の細道』は江戸時代前期の俳人松尾芭蕉の代表作である。芭蕉は弟子の河合曽良を伴って奥羽・北陸を旅し、俳諧紀行文である『奥の細道』を著した。

旅をしたのは元禄二年（一六八九）三月下旬から九月上旬までだが、実際に作品が成立したのは元禄六年から七年頃とされている。芭蕉はその間推敲を重ね、理想とする「風雅」の世界を虚構をも用いて完成させた。

本書は旅の同行者、曽良自筆の旅日記である。巻初には訪れるべき国々の神社名を計画順路にしたがって抄録したもの、旅の目標の一つでもあった歌枕（和歌に多く詠まれる名所）の数々を書き出したものなどが収められ、曽良の旅に対する準備の様子がうかがえる。

また芭蕉と曽良が現地で詠んだ句の記録もあり、俳諧活動の実状や句の初案形・制作日時などを知ることができる。

中でも元禄二年三月から八月五日までの日記は、「細道」の旅日記として知られ、日付・天候・旅程・宿泊等、旅の事実が克明に記されている。

昭和十八年に本書が翻刻紹介されてから、「細道」研究は飛躍的に進展した。この日記の内容により、文芸作品としての『奥の細道』の虚構性と旅の事実を比較対照することができるようになったのである。

芭蕉の紀行文に対する制作意識を解明するのに最も基礎となる重要な資料である本書は、昭和五十三年六月に重要文化財に指定された。

（天理図書館　西口尚子）

『奥の細道行脚之図』より

天理図書館のお知らせ　Tel：0743 - 63 - 9200　http://www.tcl.gr.jp/
◆平日（午前９時～午後５時半）　土・日・祝（午前９時～午後４時半）
○２月の休館日：13日～22日・28日
（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）